

**2020年度 緩和ケア内科にて初期臨床研修を終えた研修医の先生方より
感想をいただきました。**

◆◆ 山本泰之先生 ◆◆

この度緩和ケア内科をローテートし印象的だったことは毎朝のカンファレンスです。ここでは医学的見地のみならず、看護学的視点、心理学的視点、社会的視点など様々な角度から一人の患者の最良のケアプランについて討議します。これは緩和ケア、ひいては医療そのものが医学だけでなく、看護学、心理学、薬学、栄養学、その他様々な分野から成る事を端的に示しています。

医は仁術。医はサイエンスであると同時にアートである。

医療について述べる格言は古今東西ありますが、実践の場で医療とは何なのかと言う問いについて考える機会は意外と多くありません。

緩和ケア内科での主科や他職種とのディスカッションを通じ、医学の専門性は医療の中でいかに発揮されるべきなのか？医学を修めた私は患者に何を還元すべきなのか？そのことを痛切に考えさせられた次第です。

最後になりましたが、緩和ケア内科の先生方、スタッフの方々、そして何より身をもって学びの機会を与えて下さった患者さん、患者家族の方々に厚く御礼申し上げます。

◆◆風張広樹先生◆◆

自分は研修医二年目終了のほぼ直前に緩和ケア内科の研修をさせていただきました。

そこで、いままでの医療とのギャップに衝撃を受けました。今まで自分が研修してきた医療は患者の症状をもとに採決データや画像データで患者の状態を把握し、それをもとに治療介入を行うといったものでした。それに対し緩和ケアで行っている治療は数値化するのが難しい患者の状態・症状に対しての加療が中心であり、ほかの科との違いに衝撃を受けました。特に数値化しにくい患者の状態を逐次把握し、その状態に合わせた対応を見ていくといったものです。特に悪性腫瘍による症状か医療用麻薬による症状かの鑑別などはいままで考えたこともなかった内容で大変勉強になりました。今後内科医として働いていくうえでこの一か月は大変貴重だったかと思います。このような機会をいただき有賀先生をはじめ高木先生・星野先生には感謝の念が絶えません。一か月間大変お世話になりました。